様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年５月２１日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2012
課題番号：23720226
研究課題名（和文）　評価的な程度副詞の成立に関する基礎的研究
研究課題名（英文）　A Foundational Study on the Historical Development of Evaluative Degree Adverbs in Japanese

研究代表者
田和　真紀子（TAWA MAKIKO）
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：30431696

研究成果の概要（和文）：本研究では、程度副詞の体系を明らかにする研究の一環として、「アマリ(ニ)」「カナリ」といった高程度を表す評価的な程度副詞の特徴を、評価性と程度性を表す意味・機能の成立過程から明らかにすることを目的とし、その基礎となる調査・研究を行った。その結果、高程度を表す評価的な程度副詞が成立した中世後期に、「イト」「キハメテ」といった中古に用いられた極度を表す程度副詞に代わって高程度を表現する語群として用いられたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：As part of a series of studies on the organization of degree adverbs in Japanese, a foundational research has been done with respect to boosting and compromising evaluative degree adverbs, such amari(ni) and kanari, in an aim to establish their relevance to the semantic functions of evaluation and gradability.　The main results obtained from this research reveal that the systematic emergence of boosting and compromising evaluative degree adverbs after the Muromachi period induces the systematic disappearance of maximizing degree adverbs, such as ito and kihamete, widely used in the mid-Heian period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	700,000	210,000	910,000

研究分野：日本語学
科研費の分科・細目：3002（言語学・日本語学）
キーワード：評価的な程度副詞、史的変遷、高程度を表す副詞、評価性、程度副詞体系

１．研究開始当初の背景

(1) 副詞研究の背景として、副詞は他品詞からの転成で成り立ち、文法的な特徴だけでは説明できない雑多な意味・機能を持っているため、分類基準の設定および体系整理がなかなか進まなかった。その中では、形容詞類を修飾し、その程度を限定する程度副詞は、文法的（構文的）な特徴がはっきりしているため、比較的分類と体系化が進んでいた。

　中でも程度副詞分類に関する研究に影響を与えた工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」は、程度副詞には程度性だけではなく評価性もあること、そして程度副詞における程度性と評価性の濃淡（強弱）は意味・機能の変化によって生じることを指摘した。この工藤(1983)の示唆を受け、渡辺実(1990)「程度副詞の体系」は評価的側面から程度副詞分類を行い、仁田義雄(2002)『副詞的修飾表現の諸相』は程度的側面から程度副詞分類を行った。

　さらに、工藤(1983)・渡辺(1990)・仁田(2002)の分類を基に、田和(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」で、程度副詞の再分類を試みたところ、大抵の程度副詞が使用できるはずの「量の構文」や「比較の構文」で使

用することができない、非常に評価性の強い程度副詞（以下、評価的な程度副詞）の一群が存在することがわかった。
(2)しかし、評価的な程度副詞は、発話者の評価と意図を知ることができる「結構」「なかなか」といった評価的な程度副詞は、コミュニケーションをとる上で非常に重要な表現でありながら、「程度性」と「評価性」の両方の特徴を持ち、多義化・多機能化しているため、現代語のみを調査対象とした共時的な研究だけで評価的な程度副詞の特徴を明らかにするには限界があった。
(3) 以上(1)(2)の背景から、程度副詞の分類と体系化を一層進めるためには、工藤(1983)が示唆していたもののこれまでの程度副詞分類の研究の流れの中で触れられてこなかった「第三の観点」、すなわち通時的な観点に基づく意味・機能変化の過程で表れる程度性と評価性の濃淡（強弱）の側面から、程度副詞を取り上げる必要のあることに気付いたことが本研究を行う動機となった。

２．研究の目的

本研究は、程度副詞の体系を明らかにする研究の一環として、程度副詞の中でも多様な意味・機能を持つ「評価的な程度副詞」を取り上げることとし、通時的観点から、評価性と程度性の意味・機能が派生・成立する過程を記述し、この語群の特徴を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

(1)本研究の方法の概要

本研究では、研究に関係する先行研究の収集と、次の①～④の作業手順によって、古語で書かれた資料の調査と用例収集、収集した用例の整理とそれをもとにした意味・機能の史的変遷の記述を中心に行った。
①古語資料を遡って調査し、日本語史上における評価的な程度副詞の分布状況を把握する。
②①で存在が確認できた評価的な程度副詞の用例を資料縦断的に収集する。
③収集した用例を意味・用法の違いを基に分類する。
④③の分類の中から代表的な用例を選び、用例の史的変遷を記述し、成立過程を考察する。
(2)各研究における個別の方法
①「副詞は「品詞のゴミタメ」か―副詞の異名の名付けと品詞分類の問題―」（『国語語彙史の研究』、第 31 集、2012 年）では、近代以降の日本語副詞において、「副詞」という品詞がどのように分類され、またその分類についてどのような評価がなされてきたかを、副詞の体系について言及している論文を収集し、その言説から分析した。

また、従来の副詞研究における共時的な体系分類に基づく副詞の品詞および副詞体系内部の分類の限界を解決するために、日本語学分野以外の分類に関する思想（植物分類学の分野の著者による系統分類の考え方）について調査を行った。
②「評価的な程度副詞の成立と展開」（『近代語研究』、第 16 集、2012 年）では、本研究を行うきっかけとなった田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」において、現代日本語程度副詞に関する主要な研究（工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」、渡辺実(1990)「程度副詞の体系」、仁田義雄(2002)『副詞的修飾表現の諸相』）の整理を行った結果、高程度を表す程度副詞が、「とても」などのような「極度を表す程度副詞」と、「結構」などのような評価性の強い「評価的な程度副詞」の二系統あることが浮かびあがってきた。この高程度を表す副詞に見られる共時的な体系がどのように成立し、展開したのかを明らかにするために、中古から近世初頭の文献資料で使用されている主な高程度を表す副詞について縦断的に用例の調査を行った。
③「中世後期における高程度を表す副詞の体系」（第 101 回国語語彙史研究会、2012 年 09 月 29 日、神戸市外国語大学）では、②の研究成果において、中世後期から近世初頭が、日本語における高程度を表す副詞体系の変動時期だったことが明らかになったため、ここでは特に変動がみられる中世後期の話しことば的な資料（狂言台本・キリシタン資料・抄物）に限定して、高程度を表す副詞の用例調査を行った。
④「成立過程から見た高程度を表す評価的な程度副詞の特徴 ―「チカゴロ」を一例として―」（『都大論究』、第 50 号、2013 年）では、「チカゴロ」という語が高程度を表す評価的な程度副詞として使用されるようになった、中世前期から近世後期を中心に用例調査を行った。特に「チカゴロ」の評価的な程度副詞としての定着度合いを見るために、近世前期から後期にかけて成立した狂言台本の用例を詳細に調査した。

４．研究成果

(1)研究成果総評

研究期間全体を通じて、本研究では、通時的な観点に基づく副詞の意味・機能の史的変遷の記述的研究と、理論的な研究の整理をもとに、現代日本語の共時的な研究だけではわからなかった、中世後期に高程度を表す評価的な程度副詞の発生によって、現代日本語副詞における高程度を表す副詞の体系の原型が形作られたことを明らかにすることができた。
(2)各研究における成果
①「副詞は「品詞のゴミタメ」か―副詞の異

名の名付けと品詞分類の問題―」(『国語語彙史の研究』、第 31 集、2012 年)

この論文では、副詞の体系を明らかにするためには、共時的な分類だけでなく、通時的な系譜を明らかにする必要があることについて、現代日本語副詞の理論的研究における「副詞の異名」の名づけを手掛かりに理論面から言及し、副詞の意味・機能の史的変遷の記述的研究を行う意義を述べることができた。

副詞は品詞分類の中でも「分類しきれない語」すなわち品詞分類から外れるものの集約場所として、近代的な日本語学研究の早いうちから「落ちこぼれ」(stragglers の丸山・岩崎一九九九による訳語)」(B.H. Chamberlain 一八八八)、「しわよせ・はきだめ」(渡辺一九七一・一九八三)、「ふきだまり」(竹内一九七三)、「ゴミタメ」(千野一九八四／亀井・河野・千野編一九九六『言語学大辞典』)、「ごみ箱的存在」(仁田一九九一・二〇〇二)、「ごみ箱」的様相(森本一九九一)「スラム街」(工藤二〇〇〇)といった「ネガティブ」な表現がなされてきた。そもそも「分類」とは共時的な観点で行われるものであり、時間の経過の中で意味・機能を変化させる副詞のようなものの整理と把握には不向きであり、限界のあることを示していた。

そこで、「分類」の限界を打開するために、「分類」に関する他分野の研究(中尾佐助(一九九〇)『分類の発想―思考のルールを作る』、三中信宏(二〇〇六)『系統樹思考の世界―すべてはツリーとともに』)を参照し、時間の流れの中で変化するものを把握し体系化する「系譜」という考え方にたどり着いた。いわゆる「分類」(類型分類)が多様なものを共時的に体系化するのに対して、「系譜」は多様なものを過去の系譜・因縁によって通時的に体系化するものである(中尾一九九〇)。これを副詞に当てはめると、副詞の意味・機能の史的変遷の記述研究によって過去の系譜・因縁を明らかにすることが、副詞の体系化につながるということになる。

本論文によって、副詞の通時的研究が副詞の体系化に寄与することを理論的に明示することができた。

②「評価的な程度副詞の成立と展開」(『近代語研究』、第 16 集、2012 年)

本論文では、中古から近世まで(古代語から近代語の成立期にかけて)「いと・きはめて」といった「極度を表す程度副詞」と、「あまり(に)・一段(と)」といった「評価的な程度副詞」の二つに分けて調査を行った結果、次の２点が明らかになった。

＊特徴的な「評価的な程度副詞」が中世以降に成立・展開した。

＊中古で一般的だった「極度を表す程度副詞」が、中世後期～近世初頭の口語的な資料においてほとんど見られなくなり、高程度を表す副詞が「評価的な程度副詞」と交替した。

本論文によって、研究開始前は予測レベルであった評価的な程度副詞の成立時期の特定と、これまで知られていなかった日本語程度副詞体系が中世後期に変化したことを明らかにすることができた点に、日本語副詞研究上の大きな意義があった。

③「中世後期における高程度を表す副詞の体系」(第 101 回国語語彙史研究会、2012 年 09 月 29 日、神戸市外国語大学)

この発表では、平成２３年度の研究で得られた結果(評価的な程度副詞が中世後期に成立し、日本語程度副詞体系がこの時期に変化したこと)を元に、もっとも変化の著しかったと考えられる中世後期の高程度を表す程度副詞の様相を調査し、報告を行った。

その結果、前代の中古から中世前期では和文資料・訓点資料共に「極度を表す程度副詞」中心の体系だったのに対し、中世後期の話しことばでは、評価的な程度副詞の語彙の増加に見られるように、「評価的な程度副詞」中心の体系へと移行したことを本発表で明らかにした。

一方現代語では、「極度を表す程度副詞」と「評価的な程度副詞」が、機能分担をして共存している体系となっている。中世後期は広義の「近代語」の始まりの時期と考えられているが、高程度を表す程度副詞の体系に関しては、現代語と体系が異なることから、中世後期の高程度を表す副詞の体系は古代語から近代語へと移行する過渡期の体系であった可能性を本発表において示唆した。

本発表における示唆が、次の科研費のテーマの一部となった。

④「成立過程から見た高程度を表す評価的な程度副詞の特徴 ―「チカゴロ」を一例として―」『都大論究』、第 50 号、2013 年

この論文では、高程度を表す評価的な程度副詞が、どのような過程を経て成立するのかを、中世後期に頻繁に用いられた「チカゴロ」という語をモデルに調査・研究を行った。

もともと中世前期の「チカゴロ」は、現代語の「チカゴロ」と同様に〈現在を含む近い過去〉という時間範囲を表していた。ところが、中世後期から近世にかけて、次の例のように、「ケッコウ」などと同類の高程度を表す評価的な程度副詞として、もっぱら用いられるようになった。

（１）それは近比かたじけなひ。(虎明本 鼻取ずまふ)

（２）近比、めでたう御ざると云(天理本 雷)

本論文では、中世から近世にかけて「チカゴロ(近比・近頃)」が、時間範囲を表す語から評価的な程度副詞となった変遷の過程

を記述し、どのような意味・機能の変化を経て、評価的な意味が成立したかを明らかにすることによって、高程度を表す評価的な程度副詞の特徴について考察した結果、一つのモデルではあるが、この「チカゴロ」の史的変遷の例から、話し手による主観的な範囲限定のもとに〈評価〉の意味が生じることを明らかにすることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
(1)田和真紀子、「成立過程から見た高程度を表す評価的な程度副詞の特徴 ―「チカゴロ」を一例として―」『都大論究』、第 50 号、2013 年、査読有

〔学会発表〕（計１件）
(1)田和真紀子、「中世後期における高程度を表す副詞の体系」第 101 回国語語彙史研究会、2012 年 09 月 29 日、神戸市外国語大学大学共同利用施設 UNITY2Ｆセミナー室 4

〔図書〕（計２件）
(1)田和真紀子、「副詞は「品詞のゴミタメ」か―副詞の異名の名付けと品詞分類の問題―」、『国語語彙史の研究』、第 31 集、pp93-108、2012 年、和泉書院、査読有

(2)田和真紀子、「評価的な程度副詞の成立と展開」、『近代語研究』、第 16 集、pp87-100、2012 年、武蔵野書院、査読無（招待有）

６．研究組織
(1)研究代表者
田和　真紀子（TAWA　MAKIKO）
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０４３１６９６

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：